



キッチン



に立つ

川崎ゆきお

「感情が入らないと何も出来ないですなあ」

「気を入れてやるということですか」

「ああ、それに近いが、気持ちが入っていないと動きにくいねえ」

「たとえば？」

「ご飯を作るにしてもだ。私は自炊でね。自分で一から作る。野菜の栽培から始めるわけじゃないよ。売られているものを適当に盛り合わせたり煮炊きしたり、焼いたり、炒めたりする。これだけでも暇は潰れる。しかしだ……」

「はい」

「まだ、聞くかね」

「はい、暇なので」

「そうだろうなあ、細かい話だから」

「続けて下さい」

「もっとドラマチックな話ならいいんだけどね、こういう話をやったからといって、役立つわけでもないし、お互いの関係が変わるほどのことでもない。だから、まあ気楽なことなんだが」

「えーと何のお話しでしたか」

「感情の話だよ。気持ちが入っていないと、動きにくいって話さ」

「それはもうそこで終わっているのではありませんか」

「終わってる？」

「はい」

「どうして？」

「だって、それを聞いただけで、もう分かりますから。やはり気持ちを入れてやらないといけな  
いなあ、というお話しでしょ」

「うん、まあ、そうだ」

「でも、暇なので、続きがあるのなら、聞きます」

「じゃ、お言葉に甘えて続けますよ。冬場はねえ。寒いからキッチンに立つのが嫌なんだ。いつもは炬燵の中にいる。そして時計を見る。食事の一時間前だ。身体を壊して医者へ行っている時期があった」

「病気の話ですか」

「それは補足だ」

「はい」

「一日三回、食後に薬を飲むことになった。間隔が問題だよ。だから、朝昼夕と一定の間隔を置いて飲む癖が付いた。もう薬は飲んでいませんがね。食事時間がそれで固定したのですよ。その計算でいけば、次の夕食を食べるには、一時間前から用意をしないといけない。米を洗い、ご飯が炊け、保温ランプが付くまで一時間かかる。だから、そろそろ炬燵から出ないといけない。しかし出たくない。ここでサボると外食か弁当になる。ご飯がないからね。パンは駄目だ。だから 買い置きはない」

「パンやうどんでは駄目なのですか」

「医者から小麦粉系は控えるように言われた」

「小麦も米も、似たようなものだと思いますが」

「そうなんだがね、しかし私はご飯が好きだ。パンやうどんよりもね」

「それで……？」

「ああ、本題ねえ。出るときだよ。炬燵から。そのとき、気に入っていないと動けない。出られない。感情がねえ、出るな出るなと言ってる。私もそれに賛同する。しかし、ここで出ないと、あとが面倒になる。では夕食はどうするかで、一時間後決めないといけない。この場合外出になる。買い置きがないからね。だから、今、このときに立ち上がった方が結果的には楽だ」

「どちらも似たようなものだと思いますが」

「似ている。どちらにしても一時間後、何かを食べることになる。最終的には食べる。これはもう感情や気分ではなく、腹が減っている事実の方が大きくなる。この場合はねえ、感情がどうの、気持ちの入り方がどうのじゃなく、餌に食いつく金魚のようなもの。魚を見た猫のようなもの、一直線だ。だから、私も一時間後、おそらく一直線になると思う。しかし、今ここでご飯の準備にキッチンへ行けば、慌てなくてもいい。それに外食や弁当は罪悪感がある。ハレの場ならいいのだがね、特別な日ならいいが、普段はいつも通りのものでいい」

「長いです」

「何が」

「お話しが」

「そうか、ここを説明しないと意味がないんだよ」

「はいはい」

「そして私は炬燵の中で、キッチンへ立つことの意味をよよく考えた。自分自身を自分で説得し始めたんだ。怠けないで立つことがどれだけ素晴らしいことなのかをね」

「素晴らしいのですね」

「そうだ、素敵なんだ」

「キッチンへ立つことができますか」

「そうだ。だから、ここで感情を抑えて、気持ちを入れ直すことにした」

「立ち直ろうとしたのですね」

「座っているのに、まだ立っておらん」

「はい」

「だから、座り直しだよ。少し背骨を伸ばした」

「はい、適当にどうぞ」

「ここでキッチンへ立つことが、どれだけ良いことかとね」

「善きことですね」

「それで半ば説得出来たような気がし、さあ、立とうと思いついたとき」

「はい」

「大した食材、つまりおかずだがね、ないんだよ。草とカボチャと、ちくわだけだ。卵もあったかな」

「それが今夜のおかずですね」

「気に入らん」

「はあ？」

「楽しくない。ちくわだろ。メインは」

「はい」

「ちくわがメインだよ君、ちくわを食べたいと思うかね」

「ああ」

「ちくわのために立ち上がろうと思うかね」

「さあ、それは人の好みで」

「違う。ちくわは残っていたのではなく、残ったのだよ。ちくわは買ったが、これだっというほど好きじゃない。安いので買った。しかも四本も入っておった。煮物に少し入れる程度。あれは君、小麦や塩分の含有率の高い食べ物でね。魚などどれだけ入っているか。しかも医者から小麦粉を控えるように言われておる。そうじゃなくても、ちくわのレベルは私の中では低い。それをメインに食事をするというのが気に食わん。これでやる気が失せた」

「やはり肉ですねえ」

「そうそう」

「肉の買い置きはなかったのですね」

「うむ」

「それで、どうなりました。キッチンに立ちましたか」

「立ち上がったが、やる気が失せたので、座った」

「はい、駄目でしたか」

「再起動失敗だ」

「それで」

「大相撲中継が終わり、ご飯の時間になった」

「はい」

「牛丼屋へ向かった」

「やりましたねえ」

「たまには掟を破るのもいい」

「そうですよ」

「長い話だった」

「はい、お疲れ様」

「いや、聞いている方が疲れたでしょ」

「牛丼が食べたくなりました」

「私もだよ」

了

